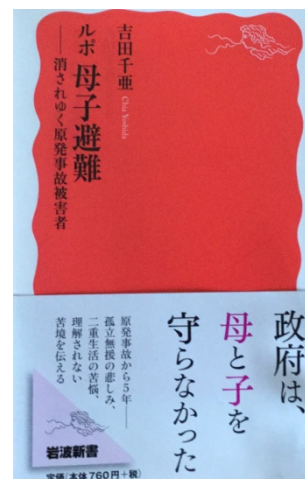


ルポ 母子避難—消されゆく原発事故被害者

表題はフリーライター・吉田千亜さんによる岩波新書新刊である。原発事故から5年経つが、ルポを読んで、こんな理不尽なことがいまだに続いていることに腹が立った。原発事故の過酷な現実を「母子避難」から切々と伝える。表紙カバー裏から— 原発事故で避難した母子の生活が困窮している。政府は、いわゆる「自主避難者」への住宅無償提供を2017年春に打ち切る。子どもを守りたい一心で避難した母親たちが、事故から5年経った今、何に不安を感じ、困り、苦しんでいるのか。事故後、避難した母子に寄り添い続ける著者が、克明に綴る。



自主避難者とは、年間被曝量が20ミリシーベルト以下の地域から避難した人たちのことだ。政府による避難指示がなかったものの、放射線の被曝影響を避けるために避難し、とくに放射線の影響を受けやすいとされる子どもを連れて避難した人が多い。

かつて避難を指示された人々は「強制避難者」と呼ばれた。それ以外とされた自主避難者たちに、原発事故から5年が経ち、今度は、いわば「強制帰還」「強制退去」が行われようとしている。5年でようやく積み上げた「暮らし」が奪われ、「被曝を避ける権利」も奪われる。

「自主ではありません。怖くて逃げたんです」 渡辺さんは、3月12日に1号機が爆発したとき、子どもたちにかっぱを着せ、ぬれマスクを二重にさせて、泣き叫ぶのをあやしながら東京の妻の実家に避難した。「それが「自主避難」と言えるのでしょうか。私は非常に疑問を持っています」「まさに自主避難という問題は、子どもが教育を受けるための権利を回復するために、仕方なく選択した」ものだ

「好きこのんで避難者の立場でいたい人なんていない。いま、必要なのは、自立したくてもできない避難者たちへの支援です。生活困窮が目の前にあります。離婚された人もいます。精神を病んでしまった方もいます。そのお母さんたちが家賃助成を切られてしまったら、生きていくことができません。どうか家賃助成を続けてください。いま、打ち切りになれば、さらに多くの生活困窮者を生んでしまいます」

いま、避難を継続することを選んだ人々、避難を継続するしかない人々に対して、何ができるのかが、問われている。政府や東電による支援も賠償もないなか、かつて住んでいた自治体からも見捨てられていく人たちがいる。彼女ら、彼らの「命」の問題は、もう、たらい回しにはできない。問われているのは、私たち自身だ。

(2016年3月10日)